

先達からのお便り

趣味に生きる

東北大学名誉教授 平賀賢二

2003年、東北大学金属材料研究所(金研)を定年退職する時に、金研の親睦団体「共融会」のニュースに「ある定年退職者の遺言」とのタイトルで、以下の内容の挨拶文を書いた。「金研は昨今の業績主義の弊害から“研究バカ”の集団となりつつあると感じる。研究が大事であるとの言い訳をして、多くのことを捨てて人が多い。なんの趣味を持たずに研究一筋でいくと、研究生活を終える時、間違いなく後悔することになる。今の長寿の時代、定年後の人生が充分以上に残っている、その時を大いに楽しむためには、研究の時間を削っても、なにか研究以外のことをやり続けるかあるいは挑戦することが大切であろう。」

大袈裟に言えば、誰にでも“死”がやってくると同じように、研究者にとっては定年退職という研究に区切りをつける時がやってくる。そして、その定年退職の後、今の長寿時代では、20年、人によっては30年以上もの時が残っている。この“老後”を有意義に使うためには、現役時代からの心構えが大切となってくる。定年後はほぼ15年を経た老人の今をお披露目して、現役の人たちが退職後を考える指針となればと思い、“趣味に生きる”とのタイトルで書いてみることにした。

人生において、嫌であるがやらなければならない「雑用」、利益を考えながらであるが楽しんでする「楽しい仕事」、利益をまったく考えずに好きなことをする「趣味」がある。現役時代、定年近くになって増えてきた「雑用」に振り回されストレスを感じざるを得なかった。この「雑用」から開放されたのが定年退職の最大の喜びであった。若い頃、「雑用」を出来るだけ避け、ある程度自分の好きなように進めてきた研究は、将来のポストや競争的資金の確保等を考えざるを得なかったが「楽しい仕事」であった。この「楽しい仕事」に加えて、定年まで登山、スキー、テニスなどの「趣味」を学生と対等あるいは先頭切ってやってきた。年齢による体力の衰えによって、今は、小さい孫と登る低い山の登山、シーズン3、4回のゲレンデスキー、月に2、3回のテニスとなっているが、それでもこの「趣味」は続いている。

若い時代から続く「趣味」はそれなりに大切であるが、新しい「趣味」に挑戦することも時間が充分ある退職者の特権である。退職後の悠々自適の生活を夢見て、岩手県の花巻(土地が安い)の森の一部を手に入れ、そこに山小屋を建てて、自然の中での晴耕雨読の生活に挑戦している。夢に見た悠々自適の生活からは程遠く、畑仕事、花壇の整備、草刈、木々の伐採と「雑用」的な仕事にふりまわされているが、



図1 吹矢の東北大会の風景。右側に立っている選手達は、右側の的(客席の下に並んでいる)をめがけて、左側の選手は左側の的(写っていない)をめがけて吹いている。的までの距離は、段位によって、8mと10mに分かれている。



図2 北海道の“ぶらぶら旅”で立ち寄った十勝岳望岳台で愛車と共に。バックの十勝岳と美瑛岳を巡る登山を終えて。

新しく挑戦した「趣味」として頑張っている。新しい「趣味」への挑戦は、新しい喜びをもたらしてくれる。地元のシニア同好会に入り始めたビリヤードは、73才の高齢からのスタートであったが、零からの出発であるので、技術の向上がみられるのが嬉しく、花巻に滞在時は、月曜日から金曜日の午後、森の仕事から逃げて、楽しんでいる。また、仙台滞在時は、スポーツ吹矢を76歳から始め、週2回の計4時間、技術向上を目指して頑張っている。この聞きなれないスポーツは、腹式呼吸が基本であることから、高齢者の健康によいとして注目されている。一昨年は、東北大会、県大会に参加したが、500名ほどの参加者による東北大会では、大きな体育館の左右の壁にそって置かれた計100個ほどの的をめがけていっせいに矢を吹く様には驚かされた(図1)。また、定年の年に購入した日産の車 X-trail(後ろの座席を取り外すと180cmほど平になり、体の小さな我々夫婦が充分寝れる)で年に2、3回、主に道の駅の駐車場で車の中で泊まり(車中泊)ながら、1週間から2週間かけての気の向くままの“ぶらぶら旅”も、自由時間が充分とれるようになってから始まった新しい「趣味」である(図2)。九州と沖縄を除いた全国を走ってくれたおんぼろ車の総走行距離は26万キロを越え、車中泊は140回ほどになっている。最近では、観光地巡

